

宮城県気仙沼市。想像を遙かに超える被災状況を目の当たりにし、自然の脅威と人間の無力さを痛感する。復旧作業は難航。被災後四カ月が経とうとする今も、街は自衛隊や機動隊車両、瓦礫撤去の為の大型トラックがひっきりなしに行き交う。道は出来た。ただ、砂利を敷き詰めかろうじて通れる道路には、車体が大きく傾くほどの泥濘も多い。一度道に迷った。一瞬



にして生活が消え去った街の風景が、津波の恐怖を無言に語る。冷たい何かが背中を駆け巡った。街の人は言う。それでもよくなった方だ、と。はじめて現地に入る者にそれ以前の現実はない。この街で、この地域でボランティアをする時に、震災の前、その後の現実が持つ意味を考えたい。砂利道を進むデイサービス利用者が前の座席の背をしっかりと挿んでい

宮城県気仙沼保健福祉事務所内に設置された、気仙沼地域リハビリ支援チーム会議。ここは、全国から訪れるボランティアスタッフの活動コーディネート拠点。コーディネーターは、気仙沼の理学療法士、後藤博音さん。当日の巡回予定、訪問先やボランティア同士の役割分担などを確認し合う。ゆつくり丁寧な、仕事の準備を進める会議室には、ごく自然な空気が流れる。



被災地支援のボランティアという「つながり」。それを自然な流れへと導く事は易しくない。この街にある、震災前と後との現実。一変した街は、支援や再建という簡単な表現では整理のつかない、様々な事情を抱えていた。言葉にすれば、知る者知らない者との微妙な歪みを含んでいる。限られた時間の中で、肩に力を入れず、でも抜かず。後藤さんのスタイルが素晴らしかった。

市内各地区を、曜日毎に定期巡回。ある一日は、午前中に避難所二件、仮設住宅六件。全国各地から訪れるボランティア。それぞれに、地域への熱き思いを胸に抱き現地に入る。被災者の生活は、未だ厳しい実情。避難所は暑い。段ボールで囲まれた特別な生活環境。仮設にも課題が多い。仮設通路の耐久性、浴室の利便性、火災等の室内安全性。長期生活の不安は散在する。



不安と課題は多い。次々と見つがっていく。ただそれは、震災という突出した一日の前と、別な観点で見つかる場面も少なくない。関わり方を考えた際には、ごく普通の生活があった。その時点での課題と、被災後の不安とを、同じ次元で考えてよいかを考えた。地域、そこにある力を活かす。その支援を行う地域リハビリ状況はまだまだ好転でき

報告 川副 巧成 (かわぞえ こうせい) / 理学療法士【e-mail: [kousei@npo-ths.com](mailto:kousei@npo-ths.com)】

所属 社団法人 日本理学療法士協会 広報部 / 業務推進部

勤務先 Total Habilitation System 株式会社 / NPO 法人【T.H.S】 / 社会福祉法人 春秋会

住所 (地域リハビリテーション事業部) 〒850-0982 長崎県長崎市柳田町 100 番

(社会福祉事業部) 〒850-0992 長崎県長崎市江川町 100 番 1